

1. タウンミーティングの実施

1.1. 目的

中心市街地活性化第3期中心市街地活性化基本計画中間案の内容を紹介し、より多くの市民に中心市街地活性化について理解を促すと共に、意見交換を通じて、市民の意見・要望を反映した計画とすることを目的に、タウンミーティングを実施した。

特に、伊賀市の目指す姿を共有し、今後の中心市街地活性化の取組に関心を持ってもらう機会としながら、今後の活性化に向けて重要と考えられる取組について意見を収集することを目的とした。

1.2. タウンミーティングの概要

1.2.1. 開催日時・場所・参加人数

【日時】令和6年1月19日（金） 19:00~21:00

【場所】ハイトピア伊賀 4階多目的室

【参加人数】8人

1.2.2. 実施内容

内容	<p>○講演： 「まちの活性化のためのポイント」 講演者：近畿大学 総合社会学部 久隆浩 教授</p> <p>○「第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画中間案」の紹介</p> <ul style="list-style-type: none">・中心市街地の現状と課題・目指すべき姿・基本方針・主な事業 <p>○意見交換： 第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画中間案の内容について、質疑・意見交換した。</p>
----	--

1.2.3. タイムスケジュール

時刻	流れ	所要時間
19:00～	開会のあいさつ	5分
19:05～	久教授の講演	45分
19:50～	「第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画中間案」の紹介	15分
20:05～	意見交換	50分
20:55～	閉会のあいさつ	5分
21:00	閉会	

1.2.4. 実施状況



1.3. 講演内容

久隆浩教授による講演「まちの活性化のためのポイント」の講演の要旨を以下に整理した。

- ・ 色々な都市で中心市街地の活性化をサポートしてきたが、伊賀市は「忍者」という海外の方も多く呼べる非常に大きなインパクトのあるコンテンツを持っており、活性化に向けた条件が良い。忍者体験の施設は楽しんでいただけるが、そのあと、その方々をどのようにまちなかに呼び込むのかという点で弱いため、ここをどう改善してくかが課題である。
- ・ 大阪府の富田林寺内町は、伝統建造物の保存地区であり、まちなみ保全を進めていた。その際、地域住民から「静かに暮らしたい、観光客はいかななものか」と言われたが、「観光地として売り出すのではなく、まち並みを守るということでやっていきたい」ということで納得していただき、現在のまちの個性につながっている。
- ・ 大阪府の黒門市場は、元々地域の人のための市場であり、多くの店は地元住民向けの店が多かった。そこから海外からの観光客の流入が増えるにつれて観光客相手の店が増えてきたが、コロナの影響で観光客が減り、たちまち立ち行かなる状況になった。観光客ばかりをターゲットにすると困った状態になるため、その辺りのバランスが大事だと組合の方が話していた。
- ・ 愛知県犬山市では、昔は地域の方々が地域のものを売りにしていたが、現在は観光客相手の店が増えており、ほとんど観光客用の土産物や写真映えする食などに偏ってしまっている。一見賑わっているようには見えるが、地域活性化を専門とする人間から見ると、本当にこれでよいのかという状況である。
- ・ 海外の観光客の方はほとんどが一見客であるが、一方で地域や近隣地域の住民はリピーターになる可能性がある。また、インバウンド向けの観光かマイクロツーリズムかといった違いもある。
- ・ ガラス食器を販売している滋賀県長浜市の黒壁は、最初からガラス食器を揃えたいくなることを想定したリピーター狙いである。株式会社黒壁のメンバーは、当初から観光地を目指しているのではなく、最後は地域の方々によって、経済的にお金が回っていくかということを考えていた。伊賀上野の中心部は何を目的にリピートしていただくのかという部分を、皆さんと一緒に考えたい。消費者の行動をどのように変えていけるのか。地域の方が地元でお金を落とす行動をしない限り、お金は回っていかない。商業者、事業者のみが頑張るのではなく、消費者と一緒に最初からまちづくりを考え、皆が関わり合い、責任を持ち合いながらつくっていくことが重要だと考える。
- ・ 大阪府茨木市の「おにクル」という複合施設は、育てる広場をコンセプトに、これまで計 108 回、述べ 5500 時間をかけて対話を行い、完成した。ここでのポイントは、お互いが責任を持ちながら、皆で力を合わせて盛り上げていこうという機

運が醸成されていることである。

- ・ 商店街活性化における空き店舗活用について話をする際は、「空き店舗」ではなく、「閉めている店舗」と言った方が正確ではないかと言っている。閉めていてもそんなに困った状態ではないため閉めたままにする、貸した方がややこしくなるから貸さない、さらに貸す気がないから家賃を下げようとしないうということになっている。このような状況ではスタートアップする方にはハードルが高い。伊賀市の新天地商店街のように、家賃を下げると一定の方が入居されることは既に分かっている。家賃の高さが、特に若い人たち、これから元気に商売しようとする人たちのネックになっていると考える。
- ・ 大和高田市の片塩商店街では、商店街自ら空き店舗の家主に家賃の値下げを交渉している。これにより、家賃が下がることによって、チャレンジを志す方が現れ、空き店舗が埋まっていくようになっている。
- ・ 徳島県神山町は、一見普通の町だが、元気な人がたくさん集まっている。何人か元気な人が移住すると、その人たちと一緒に仕事をしたいという人たちが集まるといったように、人そのものが魅力となり、人が人を呼ぶ。また、神山町の仕掛人である大南さんは、町のアイデアキラー（提案をしたら必ず批判しかしない人）の言葉には耳を傾けず、「やったらええんちゃうん」といった前向きな姿勢で取り組んでいると話していた。文句からは前に進めないということである。これらのようにまちを元気にする前に、人が元気になるということが重要である。
- ・ 滋賀県彦根市では、活性化のキャッチフレーズとして、「100の愚痴より10の提案、10の提案より1の実行」と言っている。愚痴は前に進まないため、提案しよう。ただ、提案は絵に描いた餅に終わるため、1つでもいいから実行しよう、ということである。また、四番町スクエアでは、市の補助金とか商工会議所の補助金を使わずに、身銭を切って若手商業者中心に自分たちで勉強し、再開発に取り組んできた。まとめると、できない理由を考えても仕方がないため、できる方法を考えていくことがポイントだと考える。
- ・ 100円商店街の意義は2つある。1つは、客がないのではなく、自分たちが客を引き寄せられていないという事実を再認識してもらうこと。もう1つは、今まで漫然と物を買っていた方々に、創意工夫を通して売ってもらうきっかけになることである。この2つの意義をとらえながら、100円商店街に取り組むと効果が出てくる。
- ・ まちゼミとは、それぞれの店の専門知識をお客様に教えるという取り組み。これは、お店の方に、プロとしての目利きや知識について発見してもらい、もう一度プロ意識を持ってもらうための仕掛けである。このまちゼミの使い方をしっかり考えていただきたい。
- ・ 石川県七尾市の株式会社御祓川は、七尾の店主さんが自分たちの手でまちを元気にしたいという思いで、長浜黒壁のメンバーに教を請う形でつくられたまちづくり会社である。教えられた内容は、「身銭を切らないと本腰が入らない。誰かにやってもらうのではなく、自分たちが身銭を切ってやるのが大切。」ということ。そこから、株式会社御祓川が物件を買い取り、リノベーションし、店舗に変え、今に至るといった状況がある。
- ・ 伊賀市の中心市街地も元気な人はいるが、その周囲にやる気のない人や足を引っ張る人、邪魔をする人がいるのではないかと考える。そのため、元気な方が、力を

持っている方々と共に動くことができない状態になる。茨木市の商工会議所は、茨木マイスターズ（正式名称：ガンバル若手経営者育成会）を組織し、商店街に点在する元気のある若手を1つのグループにすることで、この組織に補助金を充てられるようにした。結論としては、元気な人がすでに存在しており、元気な人同士を繋いで仲間を増やしていくことができれば、かなり地域は元気になってくる、ということ。伊賀市の中心市街地においても、みんなが繋いでいけたら良いと考える。

1.4. 意見交換内容

「第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画中間案」に対する意見交換の要旨を以下に整理した。

【意見交換】

- ・ 第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画の内容を具体的に進めていくにあたって、事業数が多く、具現化が大変である。久先生から提示された事例は、1つの事業に絞り、苦難を乗り越えながら見事にやり抜いている。同様に、伊賀市においても1つの事業を具体的に組み組んでいきたい。事業を進めるにあたっては、具体的には誰が責任をもってどう組み組んでいくのか、この部分の踏み込みが足りないと思う。空き家・空き店舗対策について、行政が民間と協働で取り組みたいのではないか。また、1つのストリートや特定の地域においてテーマを決めて、小さなことから進めていくことが良いと思う。「100の愚痴より10の提案、10の提案より1の実行」を伊賀市でも組み組んでいくべきである。(参加者)
- ・ 第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画は、地域住民、観光客のいずれをターゲットとしているのか、または両者をターゲットとしているのか、市としての考えを教えてください。(参加者)
 - 居住と観光のどちらも大切にしていきたい。城下町伊賀上野の魅力がこの町の売りであり、第1期計画から「伊賀の佇まい」を大事にするということが基本となっている。観光は観光入込客数というよりも1人あたりの消費額に重点を置くべきだと考えている。住民負担は少ない形で、賑わいや活性化につなげていきたい。また、まちなかの居住人口の増加に対して、より踏み込んだ形で事業を展開しながら、市民の方もまちづくり活動に巻き込んでいく。加えて、上野天神祭等、まちの柱となる部分を守り続け、そこに興味を持つ人に伊賀に訪訪していただく形を大切にしていきたい。大規模な忍者体験施設ももちろん大事だが、住民の理解を得ながら、住民自らまちをつくっていくことを大切にしていきたい。(事務局)
 - 観光客が来訪する地域で活性化に取り組む際は、基本的には「地域住民がより幸せに暮らしていく環境をどう作っていくか」について考える。観光のために観光施策を打つのではなく、地域住民がより幸せに暮らすために、観光を道具として活用する、という観点に立てば良い。伊賀市は観光資源が豊富なまちであるため、それをどのように地域のために活用できるかがポイントだと思う。また、オーバーツーリズムのように、地域住民に迷惑がかかるのは本末転倒であり、客単価の高い観光客をターゲットにしたほうが地域としては良いと思う。もう少しターゲットを絞り込みながら戦略を立てればよいのではないか。また、展開されている活動、イベントをHP上や冊子で取りまとめることはすぐに始められることだと思う。茨木市の「おにクル」

では、毎日カレンダーでイベントや活動の実施内容が一元的に見えるようになっており、市民が楽しみ方を考えることができるようになってきている。来訪者を上野城周辺のみではなく、城下町に滞在させるような仕掛けを考えていくとより効果的だと考える。(久教授)

- ・ 中間案紹介資料 P18 の「中心市街地の重点課題」において、重点課題に関連している全ての役所の担当部署を明記し、役所全体で事業を進めたほうがよいのではないか。(参加者)
 - 各事業の担当課は存在する。役所内で中心市街地活性化の推進会議を行っており、進捗状況や担当事業、その他の事項について、担当する課以外も含めて協議する場を設けている。今回の策定に関しても、テーマごとに作業部会を設け、協議を行っている。中心市街地活性化基本計画の策定案において、各事業の担当課を明記できるかは不明だが、可能であれば、市民向けに事業ごとの担当課の情報は提供する。(事務局)
 - 中間案においても、事業ごとの担当部署名は全面的に記載すべきだと考える。また、最終案の段階では具体的に動いていく組織が見えている状態であることが良いと考える。(参加者)
 - 茨木市の「おにクル」という複合施設では、例えば文化ホールや子育て支援、図書館等において各々のマネージャーと役所の担当課が存在している。これらを一気に通貫してマネジメントする立場として館長を務めているが、月 2 回の全体会議が行事の月次報告で終わってしまう状況になっている。そこで、LINE WORKS を活用しながら常に全員が情報共有できる手段を取り入れようとしている。伊賀市にもこのような機動力のある情報共有が必要だと思うため、商工会議所や DMO、市民団体等にも入って頂き、常に情報交換ができれば良いと考える。ただし、市役所のネットワークはプライバシーが厳しく、市民とオープンな形で情報交換をできる方法については、茨木市でも模索している。このようなことを伊賀市も模索し、実現できればと考える。(久教授)
- ・ 久先生の話は、ひしひしと感ずることばかりである。地域住民の幸せのために人がどう動いていけばいいのか、リーダー的存在をどう発掘し、育めばいいのか、空き店舗をどう貸していただけるか等について、まちづくり会社として課題と感ずている。その上で、まちづくり主体の存在が一番のネックであり、そこには地域住民の意識が大きく関わっている。特定の地域を決め、何か 1 つ目標を持って行動できれば、地域の方の意識が変わっていくと思う。人づくりの一番難しいところが宿題となっていることが現実である。(参加者)
 - 「活性化はいったい誰が望んでいるのか」という思いが本音である。そこまで困っていない状況の中で、一丸となって活性化することができるのか。神山町も中心で動き始めた人は 3 人、長浜市も最初立ち上がったのは 7 人であり、本気の方が数人スクラムを組めば、何かが動き始め、変わり始めると思う。住民の方々が本当に望むものを聞き、その実現に対して他人任せでは

なく、一人一人が自分ごととして考えていけば、実現できるのではないかと考える。だからこそ、本気になって動ける人を教えていただき、一緒に頑張りたいと考えている。(久教授)

- ・ 商売として、一気に10万円売れるか、1000円単価で100人来るかでは、後者の方が商売人冥利に尽きる。多くの観光客の来訪により、住民の邪魔になるという話もあったが、商売人としては、観光客であっても、住民であっても、道を歩けなくらい客に来てもらいたいことが本音である。(参加者)
 - 交流人口という言葉は但馬地域の開発をする際に作り出した。12万人しか住んでいない但馬地域に立派な体育館や音楽ホールをつくることは贅沢と言われた中、住民だけではなく外から来訪する交流人口を増やし、その方々も施設を使えるようにする理屈を組み立てたことで、施設の必要性を担保し、開発を進めることができた。これを伊賀上野に置き換えると、観光客が買い物をするからこそ、様々な店が必要となり、結果的に地域住民の利便性も高まっていく。この観点で考えると、観光客、いわゆる交流人口もプラスの意味として捉えることで、経済が回り、地域の利便性にもつながるというストーリーを作れば良いのではないかと考える。また、商店街が元気かどうかは、薄利多売をしないと儲からないお豆腐屋が成り立っているかどうかで分かる。お豆腐屋さんが成り立っている商店街は、それだけ客層を握っていることになるためである。また、地域の活性化という意味では、しっかりと客から支えられているかどうかは重要だと思うが、観光客はリピーターにはなりにくいため、客の中でも地域住民が重要であると考える。(久教授)
- ・ ゆめが丘にあるDMGMORIアリーナは、日本選手権が開催できる規模の素晴らしい設備。小中学生から始まるクライミング大会をDMGMORIアリーナにてどんどん展開していきたいという考えを聞いている。ここで日本選手権や世界選手権が開催されるようになると、宿泊、飲食、買い物等で観光にも経済にも良い影響がでてくる。中心市街地活性化においても、伊賀市がDMGMORIアリーナを活用できると素晴らしいと考える。(参加者)

1.5. 当日資料

<h3 style="text-align: center;">第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画 中間案の紹介</h3> <p style="text-align: center;">2024（令和6）年1月19日（金） 19:00～21:00 @ハイトピア伊賀</p>	<h3 style="text-align: center;">目次</h3> <ol style="list-style-type: none"> ① 計画の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画の概要 ② 中心市街地に関する基本的な方針 <ul style="list-style-type: none"> ・中心市街地の現状 ・アンケート結果 ・市民ワークショップ結果 ・第2期計画における目標指標の達成状況 ・中心市街地の「強み」「弱み」「機会」「脅威」 ・中心市街地の重点課題 ③ 第3期計画の目指すべき姿と基本方針 <ul style="list-style-type: none"> ・目指すべき姿と基本方針 ④ 主な事業
<h3 style="text-align: center;">第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画の概要</h3> <p>■ 策定の経緯</p> <p>伊賀市では、平成20年に第1期伊賀市中心市街地活性化基本計画を策定し、ハイトピア伊賀や駅前広場などの整備や道路の美観化、赤井家住宅やさまざまな広場の整備、景観助成事業等により、城下町の景観や佇まいの保存と回遊性の向上に努めてきた。</p> <p>また、令和2年に第2期計画を策定し、古民家活用事業、空き店舗対策事業等に取り組んでいるが、新型コロナウイルス感染症による観光入込客数やイベント参加者数の大幅な減少は、中心市街地の活性化に大きな影響を与えている。</p> <p>このような状況の中、旧上野市庁舎改修整備事業と忍者体験施設整備事業を核として、20世紀遺産20選に選ばれた「伊賀上野城下町の文化的景観」を繋げる導線を回廊に見立てた「にぎわい忍者回廊整備事業」が公民連携で動き出した。この事業は、2025年4月から開催される大阪関西万博の来場者を伊賀市に呼び込み、経済効果を得ることに加え、20世紀遺産による景観まちづくりを進めることで「市民の誇り」を醸成し、「選ばれた伊賀市」となるための取り組みである。</p> <p>これらの動きを中心市街地活性化の柱として、「第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画」の策定を進め、中心市街地から市全体の活性化につなげるため、行政と民間が連携して事業の取り組みを進める。</p>	<h3 style="text-align: center;">第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画の概要</h3> <p>■ 策定の目的</p> <p>伊賀市の中心市街地は、伊賀上野城の城下町として、伊賀地域のヒト・モノが集まり、地域を牽引してきた歴史ある地域である。しかし、近年、人口、商店等の減少や空き家・空き店舗数が増加し、市街地の空洞化・衰退が問題となっている。</p> <p>一方、平成20年の第1期中心市街地活性化基本計画策定以降、ハイトピア伊賀や駅前広場、登録有形文化財「赤井家住宅」の交流の場としての活用等により、中心市街地の拠点が形成されてきた。</p> <p>また、空き家を資源として活用した城下町ホテルの整備や、旧上野市庁舎における交流型図書館と宿泊施設からなる複合施設の整備など、新たなにぎわい創出に向けた動きが進んでいる。</p> <p>さらに、伊賀市には、伊賀米、伊賀牛など伊賀の風土と暮らしが育んだ物産も数多く存在し、これを生み出す市内農山村地域と相互利益の関係性も、伊賀市全体の発展にとって欠かせない視点である。</p> <p>これらの中心市街地の持つポテンシャルや魅力を守り、次世代につなげ、観光誘客による「にぎわいの創出」や歴史的資源の活用による新たな世代の居住増加による「まちなか再生」の実現に向け、体系的なまちづくりを官民連携で推進するための計画を策定する。</p>

第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画の概要

● 計画の概要

■ 計画期間

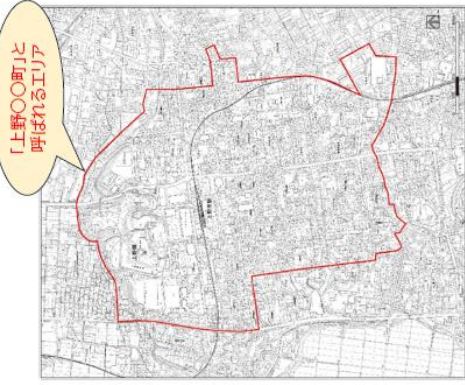
2025 (令和7) 年 4月
～2030 (令和12) 年 3月

■ 計画区域・区域面積

右図のとおり (区域面積) 約140ha

■ 計画区域・区域内人口

7,154人 (R4.9月末住民基本台帳)



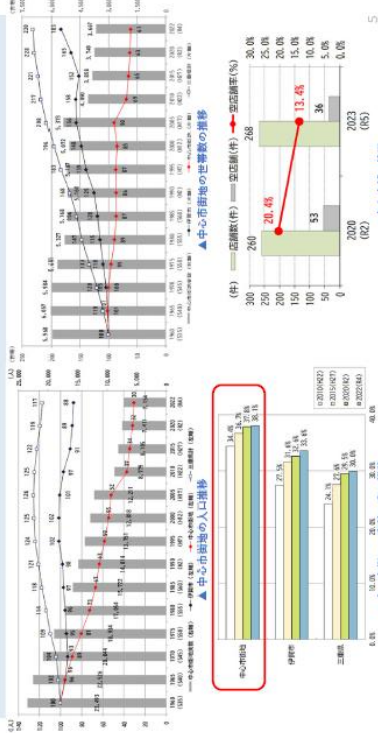
▲ 計画区域

4

中心市街地の現状

● 中心市街地に関する基本的な方針

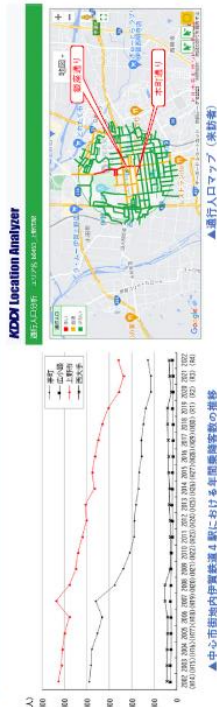
- 市全体に比べて高齢化率が高く、世帯・人口減少も急速である。また、高齢・単独世帯の割合が伊賀市全体と比較して高い。
- 空き家、空き店舗はあるものの、店舗と住居が分離していない、貸せる状態にするための改修費が高額、貸し渋り等の理由により、十分に活用されていない。



中心市街地の現状

● 中心市街地に関する基本的な方針

- 公共交通機関の利用が減少している。
- 通行人口分析によると、来訪者の歩行者は銀座通りに集中しており、東西の通りにはあまり波及がみられない。



【その他】

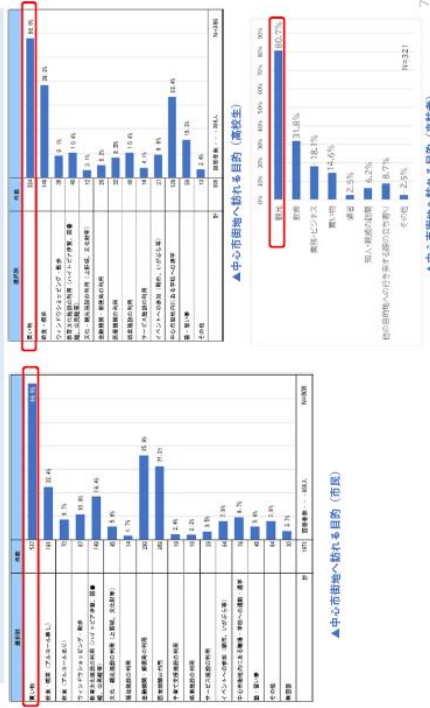
- 生活機能や教育機能が充実しており、子育て世帯からの需要は高い。
- 伊賀流忍者博物館や上野城等、全国から来訪者がある施設はあるものの、周辺につながる受け皿となるまちなかの拠点が少ない。また、これらの主要な観光施設への来場者数も減少傾向にある。
- 古民家等再生活用事業 (城下町ホテル事業) 等により、空き家の有効活用が進み、中心市街地に魅力的な拠点は増えつつある。

6

アンケート結果

● 中心市街地に関する基本的な方針

- 中心市街地への来訪目的は、市民、高校生は買い物が多く、来訪者は観光が最も多くを占める。

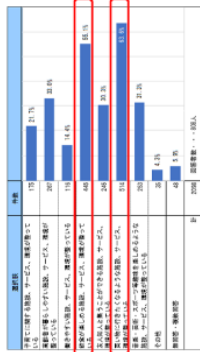


7

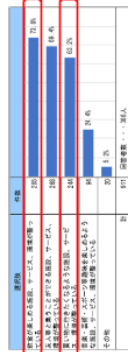
アンケート結果

◎ 中心市街地に関する基本的な方針

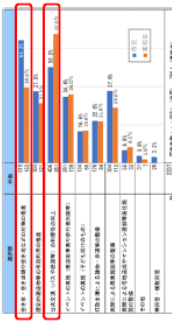
- 中心市街地の将来像について、市民、高校生は期待するまち機能として買い物、飲食に関する機能を、魅力向上・活性化の取組として空き家・空き店舗の対策推進、公共交通の利便性向上に関する取組を、回遊性向上に有効なものとして魅力的な店舗・施設の整備に対する意見が多くあがられた。



▲中心市街地の期待する機能 (上層：市民、下層：高校生)



▲中心市街地の期待する機能 (上層：市民、下層：高校生)



▲中心市街地の期待する機能 (市民・高校生)



12

▲中心市街地の回遊性向上に有効なもの (市長・高校生)

市民ワークショップ結果

◎ 中心市街地に関する基本的な方針

中心市街地の利用状況

- 飲食・通院・買い物
- 娯楽・通勤
- <個別施設>
- ハイムピア伊賀・天神商店街
- 新天地商店街・赤井家住宅
- 西町やがかん
- 等

中心市街地を利用しない理由

- 郊外のスーパーを利用する
- 観光する場所がない
- 中心市街地に行く手段がない
- 駐車場が少ない
- 等

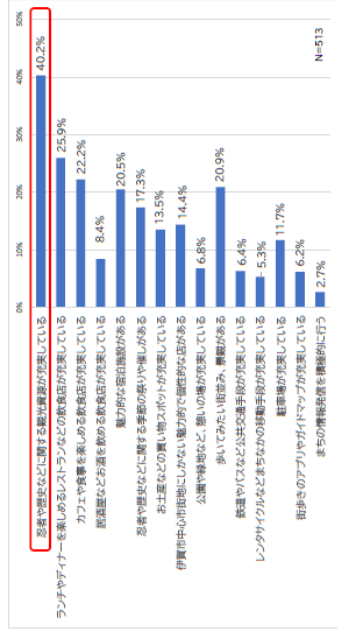
中心市街地活性化のイメージ

- 住む人が増えている
- 観光客や若者でにぎわっている
- 多くの人が行き交う
- 商売が繁盛している
- 伊賀らしさが残っている
- 徒歩や自転車で移動できる
- 等

アンケート結果

◎ 中心市街地に関する基本的な方針

- 来訪者は誰も将来像として「忍者や歴史などに関する観光資源が充実している」この意見が最も多くあがられた。



▲中心市街地がどのようなになれば行ってみようか

市民ワークショップ結果

◎ 中心市街地に関する基本的な方針

中心市街地の活性化のために必要なこと

- 交通が便利になること
- 観光資源が守られ、活用されること
- 施設が充実し便利になること
- 住みたい・住み続けたいと思える環境になること
- 等

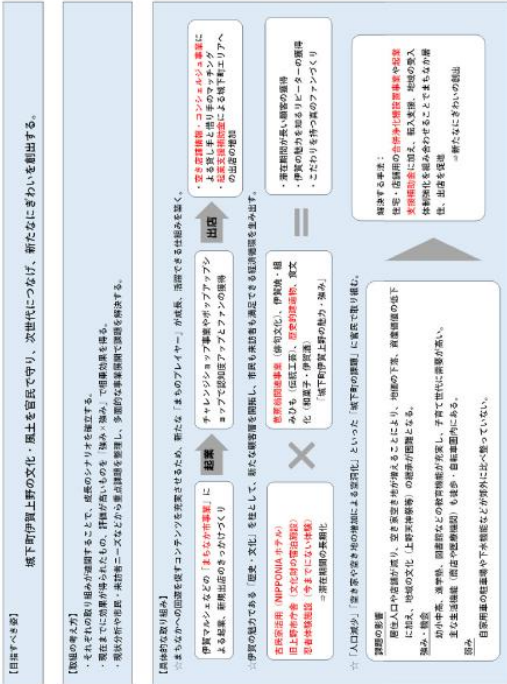


▲市民ワークショップ 全体の様子



▲市民ワークショップ 発表の様子

◎ 第3期伊賀市中心市街地活性化基本計画の目指すべき姿と基本方針



◎ 主な事業

!(2) 教育文化、医療、福祉等の整備事業

中心市街地には、既に学校や図書館等の教育文化施設が集積しているが、居住者の利便性を確保し、まちなか居住の魅力の向上を図るためには、安心して暮らせるような環境整備が必要である。特に将来を担う子育て世代の定住を促進するため、子育てしやすい環境を整備していくことで、少子化の進行を緩やかにし、将来的な中心市街地の衰退を抑制させることが期待される。

具体的には、既存ストックを活用した図書館等の教育文化施設の整備や、医療施設、介護施設、商業施設等の複合施設の整備、まちなかの子育て環境向上のための子育て支援センターの充実等を行う。

- 事業内容**
- ・子育て包括支援センター事業
 - ・ファミリー・サポート・センター事業
 - ・古民家等再生活用事業
 - ・にぎわい忍若回廊整備事業
 - ・ふれあいプラザびまわり運営事業



◎ 主な事業

※ 第2期伊賀市中心市街地活性化基本計画から継続して取り組む事業のみを掲載。
 (事業内容は2023(令和5)年12月時点)

!(1) 市街地の整備改善を図る事業

中心市街地の商業の活性化やまちなか定住を促進させ、中心市街地の空洞化を防ぐための対策を検討するとともに、まちの魅力向上のため、歴史的景観の整備を進めていく。具体的には、空き家再生や除却等を進めるとともに、景観計画に沿った修理修景を行い、城下町の風景の保存に努める。また、及び取り便所・単独処理浄化槽から合併処理浄化槽への切り替えにより快適な居住・営業環境の整備を進めると、まちなかの魅力向上を図る。

- 事業内容**
- ・伊賀市空き家対策総合支援事業
 - ・町家等修理修景事業及び助成事業
 - ・伊賀市合併処理浄化槽設置整備事業



◎ 主な事業

!(3) まちなか居住の推進を図る事業

中心市街地では、人口減少の影響により空き家や空き店舗が多く発生しており、地域の景観の悪化や魅力低下が懸念されている。伊賀市においては、これまでも空き家の再生を進める事業やまちのストックを活かす取組を進めてきているが、今後さらにまちのストックを活かした居住促進を進めることで、中心市街地のにぎわい創出が期待できると考えられる。持続可能なまちの構築を目指すためには、特に若い世代を中心とした居住促進を図る必要がある。

具体的には、まちの資産である歴史あるまちなかみ等、中心市街地における魅力を発信し、市外からの移住促進を図っていくほか、移住者の定住を促進するため、居住の支援制度の充実を図る等、誰もが安心して暮らすことができるような総合的なサポートを行う。

- 事業内容**
- ・まちなか移住コンシェルジュ事業
 - ・まちなか居住のための支援事業 (情報発信含む)
 - ・コミュニティ受入態勢構築支援事業
 - ・伊賀市空き家対策総合支援事業 (再掲)



<p style="text-align: right;">④ 主な事業</p> <h3> (4) 経済活力の向上を図る事業</h3> <p>事業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伊賀市起業創出・事業承継促進事業 ・古民家等再生活用事業（再掲） ・忍者市プロジェクト事業 ・伊賀上野NINJAフェスタ開催事業 ・ライトアップイベント「お城のまわり」開催事業 ・にぎわい忍者回廊整備事業（再掲） ・起業者支援システム整備事業 ・商業集積再生事業 ・空店舗等情報システム整備及びコンサルタント事業 ・フレイヤー誘致事業 <p style="text-align: right;">24</p>	<p style="text-align: right;">④ 主な事業</p> <h3> (4) 経済活力の向上を図る事業</h3> <p>消費者ニーズを踏まえた商業機能の展開、交流人口の増加によるにぎわいの創出が必要である。</p> <p>具体的には、空き店舗の活用に向けた支援を促進することで、消費者ニーズを踏まえた商業機能の展開を図っていく。また、まちなか市等の地域資源を活用したイベント開催などにより、中心市街地の店舗の魅力を認知してもらい、交流人口・利用者の増加を図る。さらに、新規店舗の展開として、出店希望者を対象とした勉強会や体験事業等の創業支援を積極的に行っていく。</p> <p>観光面からの経済活性化策としては、地域資源（忍者や芭蕉翁等）に関連した施設の整備やイベント等を開催し、中心市街地の魅力を発信することで交流人口の増加を図っていく。</p> <p style="text-align: right;">25</p>
<p style="text-align: right;">④ 主な事業</p> <h3> (5) 公共交通の利便の増進を図るための事業及び特定事業</h3> <p>中心市街地の人の往来を活発化させ、活気にあふれたまちづくりを進めるためには、公共交通機関による中心市街地へのアクセスの利便性向上、中心市街地内の移動の利便性向上が必要である。</p> <p>誰もが利用でき、環境負荷の軽減にも寄与する公共交通の利便性の向上により、今後増加する高齢者や学生などの交通弱者をはじめとした生活者のアクセス向上、インバウンドをはじめとした観光客のまちなか回遊を向上させる。</p> <p>事業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周遊性向上事業 <p style="text-align: right;">26</p>	<p style="text-align: right;">④ 主な事業</p> <h3> (5) 公共交通の利便の増進を図るための事業及び特定事業</h3> <p>中心市街地の人の往来を活発化させ、活気にあふれたまちづくりを進めるためには、公共交通機関による中心市街地へのアクセスの利便性向上、中心市街地内の移動の利便性向上が必要である。</p> <p>誰もが利用でき、環境負荷の軽減にも寄与する公共交通の利便性の向上により、今後増加する高齢者や学生などの交通弱者をはじめとした生活者のアクセス向上、インバウンドをはじめとした観光客のまちなか回遊を向上させる。</p> <p>事業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周遊性向上事業 <p style="text-align: right;">26</p>

2. 地区説明会の実施

2.1. 開催日時・場所・参加人数

◆上野西部地区

【日時】令和6年1月17日（水） 19:00~20:00

【場所】上野西部地区市民センター

【参加人数】運営委員（自治会長、部会長・副会長） 33人

◆上野南部地区

【日時】令和6年1月26日（金） 19:30~20:15

【場所】上野南部地区市民センター

【参加人数】ときめき部会員 25人

2.2. 主な意見

◆上野西部地区

- ・ 上野天神祭のダンジリ行事は、第3期計画の目指すべき姿である「城下町伊賀上野の文化・風土を官民で守り、次世代につなげ、新たなにぎわいを創出する」そのものであるが、現状、担い手が減少しており、今のままでの継続が難しくなっていくと思う。計画に掲載することで、応援してくれる人が増えることを期待する。
- ・ 来訪者アンケートにおける中心市街地のイメージとして、「祭りや伝統行事」が著しく低い。市外に対する情報発信が足りていない。
- ・ 観光客の駐車場の問題がある。現状は施設ごとに駐車料金を取られるため、不便である。市内共通の駐車券等を発行してはどうか。

◆上野南部地区

- ・ 道路の舗装がぼろぼろで、歩いていると滑りそうになる。また、はがれた舗装が飛び石となって民家に当たっており、観光地としてどうかと思う。何か対策が必要ではないか。
- ・ 色々な施設を建てるのは良いが、保守や維持を考えた予算取りにしてほしい。
- ・ 南部地区一番の要望としては、南平野木興線を建設してもらいたい。鉄砲町とその周辺は、救急車も入れない。
- ・ NIPPONIA ホテルに泊まったが、横のつながりが無いと感じた。ホテルだけで完結するのではなく、窓口として観光客を引き寄せ、そこから市の土産や食事など他のところにつなげることができるような連携を上手くしてほしい。